

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520307

研究課題名(和文) イギリス・ロマン主義文学におけるダンテの意義とコスモポリタニズム

研究課題名(英文) Dante and Cosmopolitanism in British Romanticism

研究代表者

後藤 美映 (GOTOH, Mie)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20243850

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ダンテの『神曲』を受容するという形でロマン派第二世代の詩人たちによって表明された政治的美学的改革とコスモポリタニズムの精神性を明らかにした。

具体的には、『神曲』は、ロマン派詩人の叙事詩創作に大きな影響をもたらし、当時の叙事詩に要請された伝統的な様式を超える、革新的、近代的なスタイルの範となったことを呈示した。また、ダンテ受容と軌を一にして、ロマン派の詩人たちが唱えた新しい「ヨーロッパ」文学とは、『神曲』に内在する普遍性と個との有機的調和によって生み出される、コスモポリタニズム的知の循環と革新性であったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The serious attempt to appropriate Dante's Divine Comedy allowed the second-generation Romantics the ideological and aesthetic possibilities to generate their modern and cosmopolitan epic, transcending the limits of vision as prescribed by conventional literary criteria. Through the Romantic creation and endorsement of a modern Dante, the poets gained a fresh ascendancy in a new formation of "European" literature. The modern "European" literature which the Romantics inaugurated embraced the Dantean correlation between the particular and the universal in clearly delineated but wide trajectories within which to circulate diverse ideas embedded in cosmopolitanism.

研究分野：英文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ロマン主義 ダンテ コスモポリタニズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

近年のイギリス・ロマン主義文学研究においては、ロマン派の詩人たちを第一世代と第二世代とに分け、両者の政治的、美学的対立構造に焦点をあてる動向が強まっている。そうした動向の背景には、第一世代の詩人たちがフランス革命を擁護した経験を持ちながら、後年は政治的変節によって保守的詩作を行うようになったことに対して、第二世代の詩人たちが批判の声を上げ、自由主義的改革を称揚したという、当時の歴史的社会的文脈への視点の転換が存在する。

また、言い換えれば、従来のロマン主義文学研究の基盤は、イギリス国内の自然の普遍性を歌う詩人の内省的ヴィジョンの意義を問うことにあったが、近年の研究では、ロマン主義文学を歴史の枠組みの中で捉え、コスモポリタニズムの存立を促した 1790 年代以降の政治的、経済的、文化的地殻変動とロマン主義文学との影響関係に焦点をあてるという傾向にある。

(2) これまでの研究の経緯

このような批評動向の中で、本研究の着想にいたるまでは、ジョン・キーツの詩作において、唯美主義的な評価が与えられていた「過剰」ともいえる美的イメージに、当時の趣味を逸脱するラディカルな政治的意味合いが内包されていたことを論じてきた。また、ハントを主軸にしたコックニー詩派が、その集団性や同盟意識によって、自然を背景に孤立と内省を謳うとされた従来のロマン主義詩人像を大きく変容させる精神性を擁していたことを明らかにしてきた。さらに、コックニー詩派の改革の精神が、イタリアというヨーロッパの「南」のトポスやコスモポリタニズムを磁場として、どのように表象されたかについて研究を進めてきた。

本研究では、具体的にイタリアの代表的詩人の一人であるダンテの詩をコックニー詩派が翻訳/改作し、改革の精神とコスモポリタニズムをどのように表現したかという点を明らかにした。

2. 研究の目的

本研究は、ダンテの詩を受容するという形でロマン派第二世代の詩人たちによって表明された政治的美学的改革とコスモポリタニズムの精神性を明らかにすることを目的とする。具体的にはまず、19 世紀初頭において頂点を迎えたダンテの再評価が、フランス的新古典主義の理性的、形式的規範を打破し、新しいロマン主義的趣味を呈示する目的から生じたことを明らかにする。次にダンテの詩が内包する近代性を通して、ロマン派詩人たちが企図した新しい「ヨーロッパ」文学の創出について明らかにし、最終的には、ダンテ受容にみるロマン派詩人たちの社会改革の精神とコスモポリタニズムについて論じ

る。

イギリスでのダンテ流行の歴史的経緯を概観すれば、ロマン主義時代におけるダンテの流行は、美学的趣味に大きな変革が起こったことを示す重要な出来事と捉えることができる。18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてダンテの『神曲』の翻訳が流行し、1814 年のヘンリー・ケアリーの『神曲』の完訳が、コールリッジに賞賛された 1819 年をもって、イギリスの文学史におけるダンテの年とする。

しかし、1805 年にケアリーによって最初に翻訳が手掛けられたのが『神曲』の地獄篇であったことから窺えるように、18 世紀に親しまれたダンテは「地獄篇のダンテ」であり、ゴシックとグロテスクをその特徴とし、決して熱狂的に受容されることはなかった。当時の主潮であったフランスの新古典主義の文学的趣味から見れば、中世のイタリア詩人の詩作は理性や形式という点において正統性を欠き、地獄篇で表現されるような陰鬱な場面設定や表現がゴシック趣味を想起させるのみであった。

しかし、1781 年のトーマス・ウォートンの『イギリス詩の歴史』における『神曲』の翻訳を皮切りに、ダンテはロマン派詩人たちにとって重要な詩的源となっていく。こうした転換に棹さす役目を担ったのが、ハズリットとコールリッジのダンテ再評価であった。例えば、コールリッジにとってダンテは、ラテン語よりもイタリア語を使用し、自国の言語と文学を作り上げた詩人であり、詩的言語の域にまでイタリア語を昇華させた詩人であった。一方ハズリットは、ダンテの文体が「力、情熱、自己の意思」という点において傑出しており、ダンテは魂に訴えてかけてくる情感と幻想性を持ち合わせた詩人であると高く評価した。

こうしたダンテ評価にみられるロマン主義時代の趣味の変革は、啓蒙主義における構造的統一や様式的調和よりも情感や熱情の比重が大きくなっていく文学的様式への移行にあると考えられる。さらに、コールリッジ、ハズリットのダンテ評価において共通して存在している批評精神は、両者が「近代的」詩のあり方や役目というものに着目した点にあり、ダンテは中世世界と近代世界の分水嶺に立つ「近代詩の父」として称揚されている。コールリッジとハズリットのこうした視点は、ヨーロッパにおける国家というものの成立とともに、新しい「ヨーロッパ」を「近代性」とともに再構築するという理念によって裏打ちされている。従って、ダンテを通して、ロマン派第二世代の詩人たちが表明した改革の精神と近代「ヨーロッパ」文学の意義を明らかにすることを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 平成 23 年度

研究目的にしたがって平成 23 年度は、ま

ず、18世紀末から19世紀初頭にかけてのイギリスにおけるダンテ再評価の経緯について考察した。そのためまず、国内外における広範な資料収集を行い、第一次資料はもちろん、図版や絵画といった視覚的資料等までを含めた、学際的な視点を取り込んだ資料の収集を目指した。さらに批評書を中心とした第二次資料の収集も行い、最新の批評動向への目配りも行った。

また、19世紀初頭のイタリアのヨーロッパにおける位置づけを考察するために、イタリア史、文化史等の資料も視野に入れた収集を行った。こうした考察は文学遺産としてのイギリスの正典が確立しつつあった時代にどのようにイタリア文学がイギリスにおいて取り扱われたかを明らかにするものであり、平成20年度から平成23年度の期間において行った基盤研究(C)の研究成果と連動させ、コックニー詩派の詩作におけるイタリアの意義と自由主義思想の研究をさらに発展させることを目指した。

これらの研究は、二つの国際学会における口頭発表(英語)と論文(国際的レベルのジャーナル)と図書の刊行という形で成果発表を行った。また、国際学会での発表によって、ロマン主義研究を主導する海外の研究者たちと議論する機会を得ることができ、研究を進展させるための重要な指針を見出すことができた。

(2)平成24年度

平成24年度は、平成23年度に国際学会で発表を行った研究をさらに発展させ、ダンテの『神曲』が、ロマン派詩人たちの叙事詩創作に大きな影響を与えたことの意義を明らかにすることを主眼とした。

そのため、平成23年度に収集した資料の不足を補ったり、新たな視野からの資料収集を行ったりした。その成果については、前年度同様、国際学会(英語)で口頭発表し、国内の学会誌で論文として発表した。

(3)平成25年度

研究計画の最終年度は、研究の主眼であった、ダンテの『神曲』の受容を通じて、ロマン派詩人たちが使命として掲げていた新たな近代「ヨーロッパ」文学の創出についてまとめ、その成果を発表した。

その成果については、イギリス・ロマン派学会の第一人者である Nicholas Roe 教授が主催する国際学会において口頭発表(英語)を行った。

4. 研究成果

本研究において、まず、ダンテの『神曲』がイギリス・ロマン派の詩人達にどのように受容され、その受容を通じて、彼らがイギリス詩の改革をどのように表明したかについて明らかにした。また次に、『神曲』がロマン派詩人達の叙事詩創作に大きな影響を与えたことを基に、彼らが近代的、革新的な詩のスタイルを『神曲』にどのように見出した

かを明らかにした。

さらに最終的に、ロマン派詩人たちがダンテの『神曲』を近代ヨーロッパ文学の祖として信奉し、新しい「ヨーロッパ」像を呈示したことを明らかにした。

以下、このような研究成果を上記の3つの観点から具体的に論じる。

(1)ロマン派の詩人たちが『神曲』の翻訳、もしくは改作によって目指したことは、イギリス詩の改革であった。彼らの目指した詩の改革は、ダンテの詩を通して、時代の精神性を象徴する近代的な詩を生み出すことであり、ひいてはイギリスという国の美学的趣味を新しいものへと変革していくことであった。ハント、キーツ、バイロンらに熱狂的に受容された『神曲』のパオロとフランチェスカの愛のエピソードは、キリスト教や道徳的節度といったものによって保証された社会的秩序や規範を説いた物語ではなく、自然な愛や情感によって行動する人間の自由やその自由を抑圧するものへの抵抗を象徴する物語となった。

そもそもダンテは、過去の偉大な詩人であるのみならず、故郷のフレンチェを追われて亡命生活を送った政治家でもあった。19世紀初頭において他国の支配からのイタリアの独立運動が高まり、ヨーロッパにおいてイタリアという国が専制政治への抵抗と独立を象徴する国となり、自由主義思想を信奉したイギリスの詩人たちの目指した国となった際、ダンテもまたその象徴となり得た。

したがって、第二世代の詩人たちが『神曲』の愛のエピソードを称揚し、イタリア文学の豊穡さをイギリスへ移植しようとしたことは、当時自覚されつつあったイギリス文学の遺産という保守的なナショナリズムの考え方に脅威をもたらす美学的、政治的改革であった。

こうした文化的、社会的状況を鑑みたとき、ハント、キーツにおける恋愛詩は、南の地イタリアの愛を歌うことによって、宗教的、伝統的規範を逸脱する自己を謳歌し、イギリスの美学的政治的な改革を唱えることであったといえる。

(2)当時のイギリスにおいて、叙事詩に要請された美学的趣味は、フランス的新古典主義の主潮を汲む節度と抑制であった。そしてその規範とされた作品は、ナショナリズムの意識が顕著化した時代性を反映するように、イギリスの文学遺産とみなされたジョン・ミルトンの『失樂園』であった。ミルトンの叙事詩における、宗教的倫理と崇高なイメージとスタイルは、信奉すべき最たるものであった。そうした時代背景にあって、ミルトンと双壁をなす作品として、イタリアのダンテの『神曲』がロマン派の第二世代の詩人たちの叙事詩創作に大きな影響を与えた。

例えば、ジョン・キーツの叙事詩『ハイペリオン』の創作は、ミルトンを範とし、イギリスの文学的伝統に名を連ねながら、ダンテ

の『神曲』を受容し、当時の叙事詩に求められた規範を逸脱する、自由主義的な詩作を希求した。キーツの意図した自由主義的詩風とは、ミルトンの伝統的スタイルに依拠するよりもむしろ、過剰ともいえる抒情性を喚起する崇高さを求めたものであり、それは、ダンテの『神曲』に通底するイメージでもあった。そして、ミルトンとダンテの詩作を淵源として生み出されたキーツの自由主義的叙事詩は、イギリスの文学的遺産とイタリアの文学的伝統との融合によって生み出されたコスモポリタンの精神に基づいていたといえる。

(3) イギリスにおける19世紀初頭のダンテの受容と軌を一にして、ロマン派の詩人たちはダンテの『神曲』を磁場とした新しい近代ヨーロッパ文学の創出を唱えた。特に彼らは、『神曲』に顕著である、感情を吐露する情感的な表現やイメージに、スタイルや美学的規範を超える、詩人の主体性の優位を見出し、そこに詩の近代性を認識した。

そして、感情という特殊な個に属する詩的ヴィジョンが、同時に普遍性をも獲得しているというダンテの両義的な詩的特徴に、個と全体の有機的調和を見出した。その調和は、当時の政治的文脈においては、ヨーロッパ諸国間が独立性を保持しながら統一性を得るという、新しい「ヨーロッパ」像を呈示し得るヴィジョンであった。

さらに、ダンテの詩的調和は、一人の詩人の詩的ヴィジョンが国境を越えてヨーロッパのヴィジョンとして流動し、知の循環を生み出すというダイナミズムと、新しい「ヨーロッパ」文学の可能性を内包していた。すなわち、ダンテの『神曲』の受容は、イギリス・ロマン派第二世代の詩人たちによって、偏狭なナショナリズムに異を唱え、国家の枠を超えたコスモポリタンの知の循環と革新性をもたらす大きな契機を担っていたといえる。

以上のような3点についての成果を得たが、本研究の特色は、ダンテがロマン主義文学へ与えた影響を、単にオリジナルの「模倣」や「改作」とみなすのではなく、ロマン派詩人たちが導こうとした趣味の変革、近代文学の創出、コスモポリタニズムといった知の改革にあると明らかにした点にある。

また、ダンテのロマン主義文学への影響についてのこれまでの研究は、個々の詩人の作品論に終始していた。したがって、本研究の独創的な点は、ダンテとロマン主義文学の関連性を歴史的視座に立って明らかにすることである。さらにまた、自国の文学を確立するというナショナリズムが台頭する時代であって、国家の枠を超え、さまざまな思潮と言語が行き交う混交した空間に価値を見出すコスモポリタニズムの精神性によって、詩の近代性を模索したロマン派詩人像を呈示することは、これまでのロマン派文学研究に新しい視座を提供することになると思われる。

る。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

後藤 美映、"Life to him would be death to me": The Romantic Struggle against the Miltonic Legacy in John Keats's *Hyperion*, *Essays in English Romanticism*, 査読有、Vol. 37, 2013, 49-62.

後藤 美映、書評: Noel Jackson, *Science and Sensation in Romantic Poetry*, 『イギリスロマン派研究』, 査読有、第36号、2012、65-69.

後藤 美映、"When sages looked to Egypt for their lore": Egyptian Art and the Threat of Visuality in Keats's *Hyperion*, *POETICA*, 査読有、Vol. 76, 2011, 51-63.

[学会発表](計 3件)

後藤 美映、The Romantic Reception of Dante and the Configuration of the Idea of Europe, An International Conference of Encountering Malta II, British Writers and the Mediterranean 1760-1840: Literature, Landscape, Politics, 2014年1月26日、University of Malta.

後藤 美映、"Life to him would be death to me": The Romantic Struggle against the Miltonic Legacy in John Keats's *Hyperion*, Tenth International Milton Symposium, 2012年8月21日、青山学院大学.

後藤 美映、"[1]njudicious luxuriances": Dante and Italy in Keats's *Hyperion*, Encountering Malta: British Writers and the Mediterranean 1760-1840, 2011年11月19日、University of Malta.

6. 研究組織

(1)研究代表者

後藤 美映 (Mie GOTOH)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 20243850